ベルーカ三兄弟登場！

ドキドキドキ・・・・！

ニッキの心臓の音が、ぐんぐん大きく高まっていきます。

しかも、すっごく早いスピードです。

きっと、これ以上、ドキドキが大きく、また早くなったら、ドッピューン！と心臓が飛び出しちゃうにきまってます。

そ、そんなことになったら。

ど、ど〜しよう！

タニアとリトル・ジョンも、ニッキと同じです。

男の影が近づけば近づくほど、心音が高まっていきます。

タカタカタカタカ・・・・！

これは、元気なタニアの心音。

ドッタドッタ、ドタドタドタ〜！

体の重たいリトル・ジョンの心臓も、ニッキたちよりちょっとおくれて高まっていきます。

そして、

ドキドキタカタカドッタラドタドタ・・・！

ぴったりと寄りそった三人には、みんなの心臓の音が、まるで合唱しているみたいに聞こえてきたのでした。

三人？

そういえば、ここへニッキたちを連れてき

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

これまでの話　ニッキ、タニア、リトル・ジョンは追いかけっこをしていて、モーターボートに転落。そのボートが走り出し、そのうえ舵がとれてしまったから大変！　ボートはホッグホッグ島に乗り上げてしまった。三人は島の洞くつでハチのチャミーに出会い、宝物(?)を見せられたが、そこに現れたのは…。

たチャミーの姿が見えません。
　超スピードに命をかけたハチの中のハチ！
なぁ〜んて、言ってたけれど。
　ホント、驚いちゃうくらいの逃げ足です。
と、その時！
　近づく男の影が、ぴたりと止まりました。
　しかも、三人がかくれている岩の、ちょうど向こう側のところでです。
　ぎゃっ、み、見つかっちゃった！
　ニッキは、ゴックンとツバを飲み込むと、ぎゅっと目を閉じました。
　敵は、たぶん怖ぁ〜い海賊です。
　いや、もしかしたらギャングかもしれません。
　ほら、子どもたちをお菓子やオモチャでさそい出し、捕まえては重労働をさせたりするという、アレです。
　手には、なまけた子どもをピシャリ！　とやるムチを持ってるはずです。
　そして、もう一方の手には、ギラリと輝く鉄のカギが付いている！
　カギっていったって、部屋や金庫を開けるカギではありません。
　『ピーターパン』に出てくる海賊フックのうでの先に付いている、あの恐ろしい恐ろしい鉄のカギのことです。
　そうそう、シャツのエリ首に引っかければ、子ども三人を一度に持ち上げることなど、
「カンタンカンタン！」
という、ヤツです。
　ニッキは、男のことを想像すればするほど、体がコチンコチンになっていきました。
　キョーフを飛び越えて、もう、しゃっくりも出てこなくなっちゃったほどです。
　でも、その時、
「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」
　タニアが、耳元でささやきました。
「シィ〜ッ！」
　ニッキは、あわててタニアの口をふさぎました。
　でも、タニアが、ひっしに岩の向こうの男を指さしています。
　それは、「見て見て！」という合図です。
　ニッキは、かってに一人で想像するのを止めにして、そ〜っと身を乗り出して向こう側をのぞき込んでみることにしました。
　すると。やはり。そこには！
　ムチを持った、恐ろしい恐ろしいカギの手の男が、……ジャジャ〜ン！　いなかったのです！
　あん？
　ニッキは、思わず、ズルッとコケそうになりました。
　男は、たしかにいたことはいたのです。
　でも、だ〜れもいないと思ったのか、どったりと座り込んで、おっきなキャンディをペロペロとなめ始めていたのです。
「やだ、あの人、あいつらのお兄ちゃんじゃない。」
　タニアが、また小声で言いました。
「あの子たちって？」
「ほら、同じヘッジホッグ小学校の〈ワルッコ学級〉にいる四つ子！」
「ああ……！」
　ニッキは、すぐに思いあたりました。
　その四つ子というのは、札付きのワル。イボ・トカゲのベルーカ・ブラザースという兄弟でした。
　最近、このヘッジホッグタウンにやって来たのですが、なにかというと問題を起こす連中です。
　ニッキのクラスメートもずいぶん被害にあっています。

「カンタンカンタン！」
それは、おどされて何かを取られたり、遊んでいるのをじゃまされたり、といったことです。
ちょっとでも文句を言うものがいると、兄弟は、いつだって、こう言ってすごんでみせるのです。
「言うこときかないと、アントン兄ちゃんを呼ぶぜ！」
そのワルのアントン兄ちゃんこそ、今、目の前でキャンディをペロペロやってる男だったのです。
体が大きいためか、「迫力ぅ〜！」、「強そ〜！」、「怖そ〜！」という点では、四つ子の三倍ぐらいあります。
ガタガタガタ・・・。
ほら、すでにおどされたことのあるリトル・ジョンが、ベルーカ・ブラザースの名前を聞いてふるえだしました。
「ううう、ハンバーガー、ホットドッグ、ポップコーン、それにピザ。あいつら、お腹がすくとボクのこと探すんだ。くくく……」
今まで、何回、かわいいハンバーガーちゃんたちが連れていかれちゃったことか！
リトル・ジョンは、お腹にしまいこんだポップコーンを、「今度は取られないぞ！」というぐあいに、両手で抱え込みました。
ベルーカ・ブラザースのアジトに入り込んでしまった、となると大変です。
見つかったら、何をされるか分かりません。
それに、これだけオモチャやお菓子があるというのは、どう考えてもヘンです。
よく見れば、クラスメートの名前の入ったかわいらしいバッグ、なんてものまであります。
きっと、盗んできたか、おどし取ってきたにきまってます。
早く逃げなくっちゃ！
ニッキは、そう思いました。
でも、それにしても、アントン・ベルーカがどっしり座っているのでは、逃げ出しようがありません。

『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』のゲームソフトはセガより発売中！
メガドライブ用6000円、ゲームギア用3800円。

リトル・ジョンの大失敗

「ぬっふふふ……、こいつはうまい、やっぱし、〈キャンディ・プリンセス〉シリーズの中では、イチゴ味が一番だな。」

キャンディ・プリンセスというのは、味ごとにいろいろな王女様が描かれているキャンディのこと。

アントンは、その中でもイチゴ姫がお気に入りのようです。

ペロペロ・・・チョロチョロ・・・。

しまいには、イボ・トカゲの特徴でもある長ぁ〜いベロで、ベロンベロンと王女様の顔をなめだしました。

「おえ〜！王女様がかわいそう！」

タニアが、同情の声をあげます。

「あ〜あ、キャンディ・プリンセスなら、ぼくもなめてみたいよぉ。」

リトル・ジョンは、とってもヤバイ状況だというのに、のんきにヨダレをたらさんばかりです。

と、その時、

「あっ、アントン兄ちゃん！ ずっるいや。」

奥から、例の四つ子がやって来て叫びました。

あわわわ〜っ！

ニッキたちは、またまたあわてて岩のかげに引っ込みました。

「ずるいぞずるいぞ、兄ちゃん。ここのお菓子やオモチャには、手えだすなって……。」

「そうよそうよ、ママが言ってたじゃない。」

四つ子のワルというのは、マッド、ハッド、トッド、そして女の子のミグ〜です。

四人は、いっせいにアントン兄ちゃんに文句を言いだしました。

「なはっ！ い、いやいや、ゴカイだゴカイだ。このアントン兄ちゃんが、ベルーカ一家のおきてを破って、キャンディをこっそりくうワケないだろ〜が！」

アントンが、ひっしに言いわけします。

「だって、その口に入ってるのはなんだい？」

「あん？ これか？」

アントンは、とぼけて、口にほおばったままのキャンディを取り出しました。そして、

「おお、イチゴ姫よ！ まぁ〜たキミは、こんなところに入っていたのか！ 頼むから、このアントンのことはあきらめてくれ。ったく、まいっちゃうよなぁ。何度も、こう言ってるんだが、しつっこくオレの口ん中に入ってきちゃうんだ。」

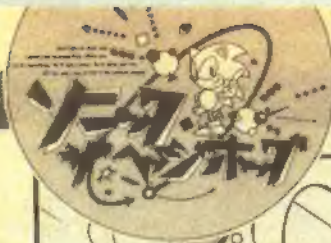
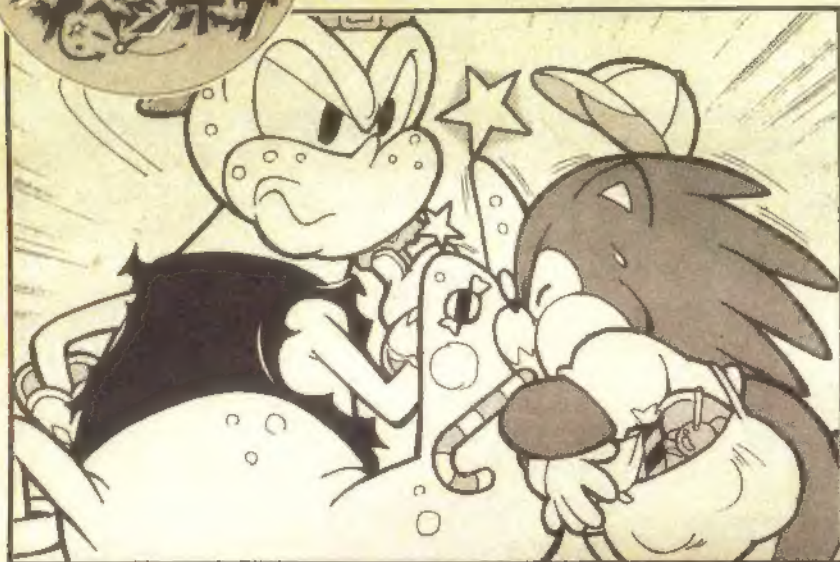
と、へ〜ゼンと言って、

「♪もてるぅ〜んで、こまっちゃうぅ〜！」

ガラガラの声で歌いだしました。

ドドォ〜ッ！

と、四つ子が、いっせいにコケました。

ムリもありません。

岩のかげで聞いていたニッキたちも、思わず「のわ〜！」と叫んでコケてしまいたいくらいでした。

さて、それからが、タイヘンです。

「兄ちゃんが、食べるんならオレたちも！」

と、ばかり、四つ子もキャンディやチョコを食べ始めたのです。

「おいおい、全部食べたらヤバイからな。なんたって、こいつは、大切な品物だ。ちょび〜っと。ちょび〜っとにしとけよ。」

アントンが、あわてて弟たちに言ってきかせようとします。

やはり、ここのお菓子やオモチャは、なにかの目的のために集められたみたいです。

でも、一度食べだしたらやめられない！っていうのが、お菓子のお菓子らしいところです。

四つ子たちは、夢中になってお菓子を食べあさりました。

「よし、今のうちだ！　逃げよう！」

ニッキは、タニアとリトル・ジョンに言いました。

ベルーカ・ブラザースが、お菓子に熱中している今をのがしたら、もうとても逃げ出せない、と思ったからです。

ところがところが、お菓子大好きのリトル・ジョン！

お菓子の山を目の前にして、た〜だ逃げ出す、なんてことはできません。

「へへッ、ほんじゃ、ぼくも一コだけ！」

そ〜っと逃げ出しながら、まず、キャンディを一コ、拾いました。でも、

「あ、これもいっかな？　バナナ味のチョコ。ぐふふふ、コレ好きなんだよね、ぼくう。」

「ちょ、ちょっとちょっと、リトル・ジョン！なにしてんのよ。早く行ってってばぁ。」

リトル・ジョンがなかなか先に行かないために、怒ったタニアが、カレのおしりをぐいぐい押しました。

「あわわわ〜、や、やめてよ、タニア。ちょっと、待って。このチョコ拾うだけだから、……あわわわ〜！」

ドスン！

タニアに押されたリトル・ジョンが、ぐっしゃと何かに顔を押しつけてしまいました。

「だはっ！」

そのさわぎに気づいたニッキが、後ろを振り返ります。そして、

「ぴぁ〜！」

「一巻の終わりィ〜！」という声をあげました。

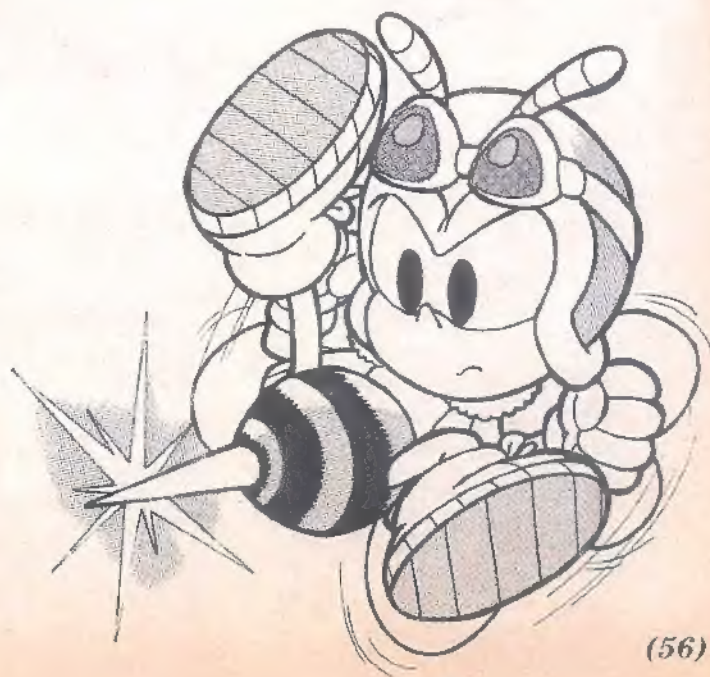
それも、当然です。

リトル・ジョンがつんのめってぶつかったのは、アントン・ベルーカの大きな大きなおしりだったのです。

もちろん、アントンもマッドもハッドもト

ツドも、それにミグ～も。
ギラ～ン！
目からは、怒りの光線を放っています。
そして、あわてまくるニッキたちに、
「あわわわ～！」
「こ、こ、こ、こ・・・・。」
怒ったアントンが、ニワトリのように、何度か「こ、こ、こ」と声をつまらせると、
「このヤロ～！」
洞くつ中にひびく声をあげました。
その恐ろしさに、「う～ん！」ニッキたちは、またまた、気を失ってしまったのでした。

第2章 オモチャ王子とお菓子姫

ブ～ンブ～ン・・・・。
ニッキは、またまたハエ（？）の音で意識を取りもどしました。
「う～ん……。うるさいハエだなぁ。」
と、目を覚ましたしゅんかん、そのブ～ンっていう音は、ハエではなく、あの超スピードに命をかけたハチ、チャーミー・ビーだということに気づいたのでした。
「ニッキ、それを言っちゃ、マズイ……！」
いつかと同じ感じに、リトル・ジョンが叫びます。でも、
「オレっちをよくも、ハエだと言ったなぁ！」
ブスッ！
ニッキが逃げる間もなく、チャミーのハリがニッキのおしりに命中していたのでした。
「痛てててて～！」
ニッキは、悲鳴をあげて逃げ出そうとしました。
でも、実は、ブラ～ンブラ～ンと体が大きく揺れただけで、ちっとも逃げることなどできなかったのです。
そうです。
ニッキとタニア、それにリトル・ジョンの三人は、ベルーカ・ブラザースに捕まり、体をロープでぐるぐる巻きにされたうえ、うす暗ぁ～い洞くつにぶら下げられてしまったのでした。
「へっ、ザマーねえな。」
チャミーが、しばられている三人にフン！っていう感じに言いました。
「なぁ～によ、あんたなんか、さっさと逃げ出したくせに！」
タニアが、やり返します。
「に、逃げただと？ チッ！ ヘンだ、素早いって言ってくんな。」
「ちえ、こわかったんだろう？ ずるいぞ、あんなおいしそうなところに連れてきといて。な～んにも、食べれなかったじゃないか。」
リトル・ジョンが、ちょっとワケの分かん

暗ぁ〜い洞くつにぶら下げられてしまったの

ないことで言い返します。
「まぁまぁ、いいじゃないか、みんな。それよりさ、チャミー。」
「おうさ。」
「キミの超すばしっこい、超かっこいいスピードを信じて、お願いあるんだけど。」
「おうさおうさ。」
ニッキの言葉にのせられて、チャミーが、急にニマァ〜っとなって寄ってきます。
ニッキにしても、必死です。
なんていっても、今はこのチャミーだけが頼りなんですから。
「ぼくたち、ここをなんとか早く逃げ出さなくちゃいけないんだ。頼むよ、あいつらのようすを見てきてくれ。」
「おうさ！　ニッキ、お前さんには、ハライタを直してもらった恩があるからな。ひとっ走り行ってきてやるぜ！」
そう、いせいよく言うと、「ドッキュ〜ン！」と叫んで、すっ飛んでいきました。
「た〜んじゅん、なんだからぁ！」
タニアが、あきれて言いました。
ところが、ところが！
それから間もなく、三人は、身がこおるような悲鳴を聞いたのです。
「ぎゃゃゃ〜ッ！」
そしてそれは、まちがいなく、あのチャミーの声だったのです。

つづく

泣きっ面にハチ！　ニッキたちは、またまた大ピンチ!!